

個別最適な学び

上智大学 総合人間科学部教授 奈須正裕



2021年1月26日、中央教育審議会は答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』を公表しました。内容として、幼稚園教育要領も含めた学習指導要領等の円滑で充実した実施に必要な各種の条件整備的施策が中心であり、新たに何かを提起するものではありません。なので、安心して日々の実践に取り組んでいただきたいのですが、今回の答申で注目を集めているものに個別最適な学びがあります。

経済産業省が「未来の教室」ビジョンで、パソコンを用いたAIドリルによる「個別最適化された学び」を提起したこともあり、画面とにらめっこしてお勉強をするイメージをお持ちの方もいると思いますが、それは全体のごく一部です。

たとえば、図1は自由研究学習と呼ばれる実践で、各自の興味・関心や必要感に応じて、何をどう学び深めても構いません。図2ではお茶のお点前を体験的に学んでいますが、実は社会科の室町時代の学習で生じた「どうして茶の湯が政治にまで影響を及ぼしたのか」という問いをきっかけにしています。子どもにとって、教科はつまらないものではありません。ただ、どこに面白さを感じ、何をさらに学びたいかには大きな個人差があります。その多様性を保障することで、より多くの子どもが教科の本質へと肉薄するのを支えることが可能となるのです。

また、図3は自由進度学習と呼ばれる教科の一人学びの様子で、子どもたちは10時間にも及ぶ単元の学習計画を自分で立て、様々な教材やメディアを駆使して、自分らしいオーダーメイドの学習を自力で進めます。教師が直接教えることはほとんどないので、授業中の主な仕事は子どもたちのみとりに気になる子の支援になります。そして、もう一つの重要な仕事は、子どもの旺盛な好奇心や多様な個性



図1 バイクの仕組みを納得がいくまで探究



図2 本物の道具でお茶のお点前を体験的に学ぶ



図3 自ら学び進める子とそれをみとる教師

に懐深く応じられるような学習環境の整備です。

個別最適な学びは、一人ひとりの興味・関心、自発性や創造性を大切に、環境による教育を主要な教育方法とするなど、多くの点で幼児教育と軌を一にします。中央教育審議会でも「個別最適化された」という使役表現に疑問の声が相次ぎ、学びの主体である子どもが、教師のみとりと支援の下、自らに「最適な」学びを見出し、自力で計画・実行できるようになることが大切だということで「個別最適な学び」という表現にあらためられた経緯があります。

今後における個別最適な学びの展開が、幼小の連携・接続や相互理解に新たな筋道をもたらしてくれることを、ひそかに期待している次第です。